



## 中柴、斎藤「愚庵ノート」を読みて

木村守江

正岡子規が短歌革新の烽火を  
あける以前に於て、掌々なる萬  
葉調の歌をよんだのは天田愚庵  
であった。

又一方神僧としての愚庵は表  
面に立つて宗務に携つたり、寺  
院の住職として化學に従事した  
りすることとはなかつたが、天龍

寺善建を完成したり、その他宗  
風を興すのに大きな功績があつ  
た人である。

十五才の前姿

更に吾人をもつとも感激せ  
しめるものは妻子としての愚庵

の生涯である。十五才の前姿

おお、殿様の大事と兄弟藏の  
安否を察する病める母の姿と、

連日校をたまにさがし廻る父

の老いた姿を見たにあかね

て戦火の中へ参りで行つた。

中山村から加賀見左衛門に參  
内され、鶴田河の門話をとなり

新川町の奥門話を移つてからは

金子為治と暁暉の最中、父親に  
見つかりながらも、抱きりから

一番大きいのを賣つて母親に届  
けるあたら、久五郎の孝心には、

人としての志操は確乎として變  
化したるものが多い。

愚庵は父母妹と年別して、

して精神的距離をかけ、金剛不

るゝことは人生のあらゆる悲哀

艰苦、かん難を味わつたのであ  
るが、少年時代に鍛えられた土

純乎たる愚庵の精神は学ぶもの  
が多い。

愚庵の身を運ぶかわやは夜の底

火鉢の灰ならずうなしの何處う

北風へ發つて人若き枯るゝ中

山崎 葉子

まといすや由緒の苑の返り花

ばかり笛遠き悔いなど呼びびます

風邪感えて化粧そば吉子の臺べ

るゝはいの間同じものがござられ

玉の美も美いがあることまか

お正月の花として季節の感

格を自ら継續したものというこ

とのが出来る。即ち愚庵の人は裕

福草などがある。南天は紅

玉の美も美いがあることまか

お正月の花として季節の感

格を自ら継續したものといふ

の花を咲かせる。冬季の生花



